

事例5 評価結果をもとに話し合いを通して共通理解を深めた取組

【中学校の例】職員研修において、学校評価の結果についての話し合いを行い、評価結果の検討を生かして、次年度に向けた重点目標の共通理解と具体策の検討を行いました。2か年にわたる取組を通して、全教職員の共通理解が協働した取組につながっています。

(1) 平成15年度職員研修

初年度は、年度末の総括的な評価の結果をもとに、全教職員をいくつかの小グループに分けて、「継続していくもの」、「改善しなければならないもの」について話し合いを行い、評価結果の理解と課題の共有化を図りました。

職員研修では、教職員の自己評価の結果と生徒のアンケートなどの回答結果を比較して、努力点の中で、特に力を入れるべき重点目標を明らかにしました。

平成15年度

職員研修 平成15年12月 日(水) 15:20~

学校評価の集計結果から本年度の教育活動を振り返り、次年度の教育計画編成のための一助とする。

- ・結論を出すことより、話し合うことを大切にする。
- ・共通点を探り、何かプラスになることを見つける。

全体会(説明5分)職員室

グループ協議(40分)

グループ編成運動会の縦割りでのA・B・C・D・Eの5グループに分ける

- ・集計結果を見ての感想や意見の発表
- ・継続していくものの確認
- ・改善しなければならないものの確認
- ・その他

全体会(発表15分)職員室

学校がこの1年間取り組んできた七つの努力目標について、44の評価項目を設定して、下記の評価結果の概要に示したように、A、B、C、D、Eの5段階で、教職員の自己評価を行いました。

しかし、教職員の自己評価では、改善に向けた努力が必要と判断される、D、Eと回答した割合は、下の表のとおりいずれの項目も低く、この評価方法では成果や課題は浮き彫りになりませんでした。

【評価結果の概要】

	A 十分達成	B AとCの間	C おおむね達成	D CとEの間	E もう少し努力が必要
(例) 学び方の基本	学習の心構えを徹底させる。(チャイム着席・聞く態度・積極的な発言発表などの実践)			A 0% B 48% C 45%	D 7% E 0%

この例では、D、Eと回答した割合が7%である。

D、Eと回答した割合	16~20%	11~15%	6~10%	0~5%
項目数/(全44項目の内)	1/44	4/44	14/44	25/44

一方、生徒にも、学習、生活、部活動、友人関係の4分野と学校生活全体について、13の項目を設定して、1年を振り返り、A、B、C、D、Eの5段階で評価を行わせま

した。その結果、課題があると推察される、D、Eと回答した割合が、学習の分野で高く、学習面での充実度や満足度が低いことが浮き彫りになりました。(表1参照)

他の項目に比べ、学習指導に関する満足度が低いことが分かりました。

表1 平成15年度 生徒の学校生活に関するアンケート(抜粋) (単位%)

区分	項目	とてもそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	まったく思わない
学 習	今の自分の成績には満足している	3.0	10.2	26.4	37.7	22.7
	この1年間自分なりにがんばって学習してきたか	1.1	16.3	49.6	25.1	7.9
	「できた」「分かった」という喜びを何度も味わうことができた	13.0	33.2	38.6	11.1	4.1
学校生活	学校生活に関して特に心配事や悩み事はない	30.8	27.2	27.5	9.1	5.4
部活動	部活動について、自分なりにがんばって練習に取り組んできたので充実している	33.3	37.7	22.6	3.3	3.1
友人関係	困ったときや悩んだときに相談できる友だちが何人かいる	38.9	36.2	20.0	3.4	1.5
	友だちと話をしたり、いっしょに作業したりするのは楽しい	56.3	31.9	10.4	1.1	0.3
	友人関係でいやな思いをしたことがない	20.7	29.3	32.9	12.0	5.1
全 体	学校生活を総合的に判断して中学校生活を楽しんでいる・充実している・満足している	23.8	42.1	23.0	9.6	1.5

その他、「一斉テストに関するアンケート」(H15 実施)や「家庭学習や通塾に関するアンケート」(H15 実施)からも、次のような現状が明らかにされました。

- ・塾に通っている生徒は第1学年で約5割、第3学年で約8割である。
- ・家庭学習が1時間以内の生徒は全学年で約6割である。
- ・家庭学習の内容は、塾の学習が中心である。

職員研修では、評価結果やアンケートの結果をもとに、七つの努力目標について話し合いが行われました。話し合いを通して、重点目標に対する教職員の意識が高まり、教職員の自己評価の在り方について見直しを図るための建設的な意見が出されました。また、生徒の評価との違いを分析し、重点目標の取組への改善策を検討していきました。

教職員の自己評価については、現在の評価方法や評価項目の設定では、重点目標に対する成果と課題が不明確になりがちであるという意見が多く出されました。特に、達成状況を示す選択肢の5段階の妥当性を検討しました。



さらに、学習の課題を浮き彫りにしていないことが明らかになり、次のように評価項目の修正・追加を行いました。

平成15年度の重点目標のうち、「基礎・基本を身に付ける」については、「ア 学

び方の基本」、「イ 基礎的・基本的内容」の2項目が設定されていました。しかし、「家庭学習や通塾に関するアンケート」の結果からは、「家庭学習が1時間以内の生徒は、全学年で約6割」であることや、「家庭学習の内容は、塾の学習が中心」であること、「今の自分の成績には満足していない」という生徒が多いことなどが分かりました。

そこで、下表のように、新たに「ウ 家庭学習」という項目を設け、家庭学習5か条の習慣付けを重点目標に掲げ、全教職員で取り組むよう共通理解を図りました。

平成 15 年度

学 習 基礎・基本を身に付けさせる	ア 学び方の基本	・学習の心構えの徹底 チャイム着席・あいさつ・聞く態度・積極的な発言発表を生徒に意識させ、実践させる
	イ 基礎的・基本的内容	・朝の自習の充実 基礎・基本(漢字・計算など)の定着を図る ・朝の読書の奨励 落ち着いた生活、読書好きな生徒、読書量の増加



平成 16 年度

学 習 基礎・基本を身に付けさせる	ア 学び方の基本	・「学習の心構え」の、話を聞く態度を育てることを重点とする ・教科と学年の連携による朝の自習の充実と読書の推進をする
	イ 基礎的・基本的内容	・基礎・基本の反復練習と単元ごとの定着を確認する
	ウ 家庭学習	・家庭学習5か条の習慣付けを重点とする

(2) 平成 16 年度職員研修

2年目には、重点目標をあらかじめ絞り込んでから話し合いに臨みました。また、話し合いの小グループも重点目標ごとに分けて行いました。

平成 16 年度	<p>職員研修 平成 17 年 2 月 日(水) 15:30~16:45</p> <p>重点目標の達成に向けての共通理解と具体策等の検討</p> <p>Plan(計画)・Do(実践)・Check(評価)・Action(改善)のサイクルで計画(到達目標等)を発表・説明 実践 評価(達成状況等の発表) 改善</p> <p>全体会(説明 10 分)職員室</p> <p>グループ協議(50 分)</p> <p>学年をこえて3つの重点目標ごとの3グループを編成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各プロジェクトで、どんなことができるか、何をするとよいか。 ・達成状況を目に見えるようにするための方策はあるか。そのためにどんな準備が必要か。 ・育ってきた能力や態度、さらに育てていかなければならない能力や態度の確認や検討。 <p>全体会(発表 15 分)職員室</p> <p>次年度の重点目標</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 授業の充実と家庭学習の習慣化(学力アップ) (2) 学校行事と部活動の充実(感動アップ) (3) いじめの解消とマナーの向上(心アップ)
-----------------	--

平成 15 年度の話し合いの結果から、「ウ 家庭学習」の項目を設け、家庭学習の習慣化を図る方針が出され、平成 16 年度には、教職員一人一人がこの重点目標達成のために意識した取組を続けてきました。しかし、年度末における学習指導に関する教職員の自己評価は、次ページ表 2 のような結果でした。

表2 教職員の自己評価の結果

		A	B	C	D
学 習	学び方の基本	10.2%	77.0%	12.8%	0.0%
	基礎的・基本的内容	15.7%	58.1%	26.2%	0.0%
	家庭学習	0.0%	26.4%	70.5%	3.1%

A = 十分達成している B = おおむね達成している C = もう少し努力を要する D = 大いに努力が必要である

「家庭学習」については、自己評価の「C」と「D」を合わせると73.6%になりました。多くの教職員が「家庭学習の習慣化」を課題としてとらえたこととなります。

それでは、成果はなかったのでしょうか？

実は大きな成果があったと私は思います。それは、前年度、職員研修の場で話し合い、検討された「家庭学習の習慣化」を全教職員が「学校が取り組む重点目標」として意識して取り組むことができたことです。

教師一人一人が「家庭学習の習慣化」に一所懸命取り組んだからこそ、評価基準も高くなり「C」評価も多くなったと考えています。ただ、やはり「C」は「C」であることをしっかり受け止め、次年度は全教職員が協働して取り組める具体策づくりにこの評価結果がつながるといいですね。



一方、生徒の学校生活に関するアンケートでは、教職員の自己評価とは逆に、「A」、「B」の回答が数%程度増加している項目が、14項目中11項目に及びました。全体として、昨年度とほぼ同様の傾向か、やや充実度や満足度が高い傾向がみられました。

平成16年度 生徒の学校生活に関するアンケート結果(抜粋)

(単位%)

区 分	項 目	とてもそう 思う	そう思う	どちらとも 言えない	そう思わ ない	まったくそう 思わない	年度
学 習	今の自分の成績には満足している	3.7	13.2	28.4	32.7	22.0	H16
		3.0	10.2	26.4	37.7	22.7	H15
	この1年間自分なりにがんばって学習してきたか	6.9	30.1	36.4	19.4	7.2	H16
		1.1	16.3	49.6	25.1	7.9	H15
「できた」「分かった」という喜びを何度も味わうことができた	15.5	36.3	35.9	9.3	3.0	H16	
	13.0	33.2	38.6	11.1	4.1	H15	
学校生活	学校生活に関して特に心配事や悩み事はない	31.2	27.4	22.1	9.0	10.3	H16
		30.8	27.2	27.5	9.1	5.4	H15
部活動	部活動について、自分なりにがんばって練習に取り組んできたので充実している	35.8	27.1	25.3	4.3	7.5	H16
		33.3	37.7	22.6	3.3	3.1	H15
友人関係	困ったときや悩んだときに相談できる友だちが何人かいる	38.9	36.2	20.0	3.4	1.5	H16
		39	36	20	3	2	H15
	友だちと話をしたり、いっしょに作業したりするのは楽しい	60.6	25.3	10.1	2.9	1.1	H16
		56.3	31.9	10.4	1.1	0.3	H15
友人関係でいやな思いをしたことがない	22.5	29.6	31.4	11.4	5.1	H16	
	20.7	29.3	32.9	12.0	5.1	H15	
全体	学校生活を総合的に判断して中学校生活を楽しくている・充実している・満足している	31.0	35.2	21.7	8.1	4.0	H16
		23.8	42.1	23.0	9.6	1.5	H15

教職員の自己評価と生徒の学校生活に関するアンケートを分析し、課題に対する認識を深めました。平成 16 年度の職員研修の場では、学校生活、部活動など、自校の強みを生かしながら、課題である学習指導の充実に向けて、以下のような具体策を提案することができました。

平成 17 年度は、この具体策に取り組んでいます。

(授業の充実と家庭学習の習慣付けをめぐる課題の分析)

- ・生徒の評価を指導方法の改善に生かそうとする積極的な取組ができる雰囲気づくりが進んだ。
- ・意欲がある生徒は、解決法を塾に求めている。
- ・意欲がない生徒をどう指導するかに着目する。
- ・かつては、できるだけ補充学習を行った。
- ・入学後の早い段階で、中学校の勉強の仕方を身に付けさせる。(予習・復習・テストの準備を含む。)
- ・重点的に指導する基礎・基本の内容(反復学習可能なもの、家庭学習で取り組めるもの、自己評価可能なもの)を明らかにする。
- ・「毎日宿題はやってくるものだ」と意識付ける。

(授業の充実と家庭学習の習慣付けのための具体策)

- ・授業評価については、実践を通じた改善を重ねてシステム化に向けて努力する。
- ・先輩のノートを見本として見せる。
- ・課題を出せば家庭学習に取り組む生徒もいる。
- ・テストの目標(点以上合格)を具体的に示す。
- ・課題の取組状況を教師がチェックする。
- ・家庭学習の仕方を指導する。

この事例から学ぶこと!

- 1 テーマを絞り込んで評価結果の検討を行ったことです。
- 2 評価結果をもとに学校の教職員同士で検討するしくみが確立されたことです。
- 3 達成度や向上の現状を数値化することで、具体的に授業改善を検討する必要性や全教職員で検討する意義について気付き、実際の検討につながったことです。

問題点とその改善策を自由に話し合える雰囲気の中、学校評価の結果に関する検討会がなされたことがポイントです。

教職員が話し合いを通して、問題点を洗い出し、改善の具体策を出すことで、次年度は、検討した具体策について全教職員が意識して取り組むことができました。

